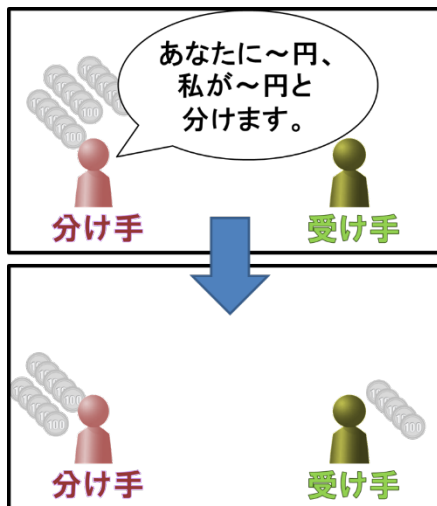


【実験方法】

2012年から2017年までの間に複数回行われた実験で、協力行動を測定する複数の経済ゲーム実験（図1）に参加し、その意思決定にかかった時間を測定した。本研究では協力行動以外にも、利他傾向を測定する社会的価値志向性尺度（図2）を異なる方法で複数回測定し、他者から搾取されることを回避したいと思う傾向である社会的リスク回避傾向を測定した。

図1 経済ゲームの一例（独裁者ゲーム）



独裁者ゲームは2人1組で行われた。分け手は実験者から受け取ったお金を自分自身と受け手との間でどのように分けるかを決め、受け手は分け手が決めたとおりのお金を受け取った。この実験では、分け手の役割になった人が受け手に渡す金額が協力行動の指標として用いられた。独裁者ゲーム以外にも、囚人のジレンマゲーム、公共財ゲーム、信頼ゲームが協力行動の指標として用いられた。

図2 社会的価値志向性尺度の一例

●「A」か「B」のどちらを選ぶかをおたずねします。
 そのどちらを選ぶかで、あなたともう一人の人（「相手」と呼びます）が、お金を手に入れたり失ったりします。
 本当に結果に応じてお金を手に入れたり失ったりする場面を想像しながら、「A」と「B」のどちらを選ぶかを決めてください。
 相手も（相手から見て）同じ「A」と「B」のどちらかを選ぶので、その結果に応じてあなたはお金を手に入れたり失ったりします。最終的に手に入れる、あるいは失うお金は、2人がそれぞれどちらを選ぶかの組み合わせで決まります。

5) A : あなたは390円を失い、相手は1450円を失う
 B : あなたは750円を失い、相手は1300円を失う

AかBのどちらかを選んでください。

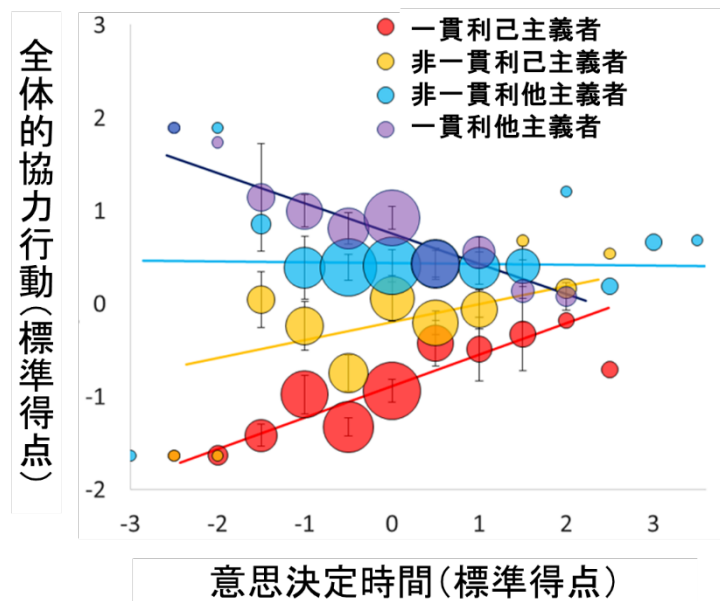
A B
 1 2

自分と他者の中で仮想的にお金を分配する状況に直面した場合、どのような分け方を好むかをたずねる。複数の回答の結果によって、回答者は利他主義者（Prosocial）と利己主義者（Proself）に分類される。

【実験結果】

社会的価値志向性尺度で一貫して利他主義者と分類された人は、素早く意思決定を行うときには協力的に振る舞い、意思決定に時間をかけると非協力的に振る舞うことが明らかになった。一方、社会的価値志向性尺度で一貫して利己主義者と分類された人は素早く意思決定を行うときには非協力的に振る舞い、意思決定に時間をかけると協力的に振る舞うことが明らかになった（図 3）。また利他主義者の意思決定の時間は社会的リスク回避傾向が高まるほど長くなっていた。この結果は、早い意思決定では協力する人々も、他者から搾取される恐れについて考えることに時間を費やすと協力的に振る舞うのをためらうようになることを示唆している。また時間をかけて協力する利己主義者は、短期的な利益ではなく、自身の評判などを含めた長期的な利益を考慮して協力することが示唆された。

図 3 社会的価値志向性ごとの全体的協力傾向と意思決定時間の関係



図の縦軸は全体的協力傾向を表しており、数字が大きくなればなるほど協力傾向が高いことを示している。横軸は意思決定にかかった時間を表しており、数字が大きくなればなるほど意思決定にかかった時間が長いことを示している。一貫利己主義者は意思決定の時間が長い人ほど協力傾向が高く、意思決定の時間が短い人ほど協力傾向が低い。一方で、一貫利他主義者は意思決定の時間が短いほど協力傾向が高く、意思決定の時間が長い人ほど協力傾向が低い。協力行動と意思決定の時間はそれぞれ標準化された得点である。

【実験の成果】

社会の中には、その人が持つ社会的価値指向性によって、素早く直感的に協力する人々と、自己利益を追求する人々の両方が社会の中には存在していると言える。それら 2 種類の人々は異なるメカニズムで協力行動をとると考えられるため、その両者から協力行動を引き出すには、単一人間モデルではなく少なくとも 2 種類の人間モデルを仮定した制度が必要になる可能性を示している。

以上